

## 〈総説〉

# 悪性骨腫瘍に罹患した思春期・若年成人のサバイバーが認識する 身体機能の変化により生じた生活への影響

A Qualitative Literature Review: Impact on life resulting from changes in physical function  
as perceived by Adolescent young adult survivors of malignant bone tumors.

勝本祥子<sup>1,2</sup> 岡光基子<sup>2</sup> 矢郷哲志<sup>2</sup>

1 東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科

2 東京科学大学大学院 保健衛生学研究科

Shoko KATSUMOTO<sup>1,2</sup>, Motoko OKAMITSU<sup>2</sup>, Satoshi YAGO<sup>2</sup>

1 Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

2 Graduate school of Health Care Sciences, Institute of Science Tokyo

**要 旨：**目的：悪性骨腫瘍のサバイバーを対象とした質的研究を用いて、思春期・若年成人のサバイバーの結果に着目した文献検討を行い、思春期・若年成人のサバイバーが認識する身体機能の変化により生じた生活への影響を明らかにし、課題を検討することとした。方法：悪性骨腫瘍のサバイバーを対象とした質的研究を PubMed、CINAHL、医学中央雑誌 Web 版を用いて検索し、選定基準を満たす文献を選定した。悪性骨腫瘍に罹患した思春期・若年成人（15 歳～39 歳）のサバイバーが認識する、「身体機能の変化により生じた生活への影響」に焦点を当てるため、文献から思春期・若年成人の記載を抜き出して内容分析を行った。結果：8 文献が選定され【日常生活動作の困難】【「新しい体」と生きていくための再構築】【社会参加の難しさと人付き合いの変化】の3つのカテゴリーと、[身体機能の変化に伴う制限][日常生活動作の学び直しと自己管理][新しいアイデンティティの獲得][社会活動への参加の減少]等の10のサブカテゴリーが生成された。結論：アイデンティティの再構築やボディイメージの変容の受容を促す支援とともに、心理的な不安定さに寄り添うこと、友人との関係性や就労の継続など本人の意思を尊重した社会生活のサポートが医療従事者に求められる。今後の課題として、思春期・若年成人の悪性骨腫瘍のサバイバーが認識する患肢の痛みや倦怠感など、生活に影響を及ぼす要因の実態とセルフケアや対処方法を明らかにすることが急務である。

**Abstract: Objectives:** This study aimed to explore the impact of changes in physical function on the lives of adolescent and young adult survivors of malignant bone tumors, focusing on their perceptions through a qualitative literature review. The study also sought to identify key issues that need to be addressed.

**Methods:** Original qualitative research articles reporting survivors of malignant bone tumor were searched on the following databases: PubMed, CINAHL, and Ichu-Shi web database. To focus on the “impact on life resulting from changes in physical function” as perceived by adolescent and young adult (15-39 years old) survivors of malignant bone tumors, we extracted descriptions of adolescents and young adults from the literature and conducted a content analysis.

**Results:** Eight studies were selected, revealing three main categories: 1) difficulties in activities of daily living, 2) the reconstruction of identity while adapting to a “new body” and 3) challenges in social participation and changes in interpersonal

relationships. Ten subcategories emerged, including “limitations due to physical changes”, “the need to relearn daily living skills and self-management”, “the acquisition of a new identity”, and “decreased social activity participation”.

**Conclusion:** Changes in physical function resulted in alterations to identity and body image, which significantly impacted survivors' lives. Psychological instability arose during the process of identity reconstruction and body image acceptance, highlighting the need for medical professionals to have provided appropriate psychological support. Additionally, support for social relationships, including interactions with friends and the continuation of employment, should have been tailored to align with the survivors' preferences. Future research should have focused on examining the impacts of pain, fatigue, and self-care among survivors, as a deeper understanding of these factors was essential for improving support systems and enhancing the daily and social lives of individuals recovering from malignant bone tumors.

**キーワード:** 悪性骨腫瘍, がんサバイバー, AYA 世代, 希少がん, 文献検討

**Keywords:** Bone tumors, cancer survivors, Adolescent and young adult, Rare Cancer, Literature review

## I. 緒言

悪性骨腫瘍は、好発時期が10～20代の希少がんで、思春期・若年成人期（15歳～39歳）の悪性骨腫瘍罹患患者数は2016年～2018年の3年間のがん登録者数は640名である<sup>1)</sup>。悪性骨腫瘍の5年生存率は1970年代までは30%未満であったが、化学療法や外科的手術の飛躍的な発展に伴い、2000年以降は診断時に肺転移がない場合の5年生存率は70%となり、サバイバーは増加傾向にある<sup>2)</sup>。ほぼ全数の悪性骨腫瘍に罹患した患者が腫瘍切除術を受けており、主流であった患肢切断術に変わり、近年では80%以上の患者が患肢温存を第一選択としている<sup>3)</sup>。患肢温存群と切断群の身体機能やQOLの比較検討は先行研究において多くなされ、メタアナリシスでは患肢温存群と切断群の身体機能に有意差はないと報告されている<sup>4)</sup>。身体機能のスコアが低いとQOLが低い<sup>5,6)</sup>ものの、他のがんサバイバーと比較するとQOLのスコアが高いことが明らかにされている<sup>7)</sup>。よって、悪性骨腫瘍のサバイバーは一見するとQOLに問題がないと評価されやすい。しかし、身体機能の変化が生活に及ぼす影響は、量的な尺度では評価が難しく、サバイバー各々の生活により異なると予測される。しかし、思春期・若年成人のサバイバーを対象とした質的研究は極めて少ない。

本研究の目的は、悪性骨腫瘍のサバイバーを対象とした質的研究を用いて、思春期・若年成人のサバイバー

の結果に着目した文献検討を行い、思春期・若年成人のサバイバーが認識する身体機能の変化により生じた生活への影響を明らかにし、課題を検討することとした。

## II. 用語の操作的定義

生活：本研究における生活の定義は、日本看護科学学会による看護学を構成する重要な用語集の生活の定義<sup>8)</sup>に準じて、「人間の生存そのものであり、各個体の主体的営みである。この営みには、生命維持に直結する呼吸・循環・体温や、生活リズムを作りだす運動・休息・食事・排泄・清潔・更衣、社会的活動としての遊びや学習を含む労働、地域社会における活動としての慣習、性差に応じた活動や環境が内包されている。その生活は、その人の価値観、習慣、考え方、暮らし方、生き方などによって形成される」とした。

日常生活：広辞苑第7版<sup>9)</sup>による「生存して活動すること、生きながらえること」を参考に、生命維持に直結する日常生活動作とその人らしい生活を送るための行動と定義した。

社会生活：広辞苑第7版による「世の中で暮らしてゆくこと」を参考に、家族や社会における役割や、暮らしを立てるための行動と定義した。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 対象論文の選定方法

##### 1) 文献の検索方法

対象とする論文は、文献データベースのMEDLINE、CINAHL、医学中央雑誌Web版（医中誌）を用い、それぞれのデータベースのシソーラス用語で検索した。MEDLINEは("bone neoplasms" OR "osteosarcoma") AND ("qualitative research" OR "narration" OR "interviews as topic" OR "focus groups" OR "grounded theory" OR "anthropology, cultural")、CINAHLは("Osteosarcoma" OR "Bone Neoplasms") AND ("Qualitative studies" OR "Narrative" OR "Interviews" OR "Focus Groups" OR "Grounded theory" OR "Ethnographic Research")、医中誌は(骨腫瘍 OR 骨肉腫) AND (質的研究 OR 語り OR インタビュー OR フォーカスグループ OR グラウンデッド・セオリー・アプローチ OR 民俗)を検索用語とした。

対象文献は2000年以降に公開された文献とし、2024年6月20日に検索した結果、MEDLINE113件、CINAHL 3件、医中誌は会議録を除き46件、計162件の文献が抽出された。MEDLINE とCINHALの重複文献3件を除いた計159件が検索された。

##### 2) 分析対象文献の選定基準と除外基準

分析対象論文の選定基準は、①全ての研究対象者が腫瘍切除術を経験した悪性骨腫瘍のサバイバーである、②悪性骨腫瘍のサバイバーの経験に関する質的研究、③思春期・若年成人のサバイバーの語りを抽出できる、④英語または日本語で書かれた原著論文、とした。

除外基準は、①対象者に悪性骨腫瘍の腫瘍摘出術前の患者を含む、②悪性骨腫瘍のサバイバーの家族を対象を含む、③複数のがん種のサバイバーを対象としている、④悪性骨腫瘍のサバイバーの経験に関する内容ではない研究、⑤思春期・若年成人の悪性骨腫瘍のサバイバーの発言であることが明確ではないもの、⑥量的研究、⑦英語または日本語以外の論文、⑧総説など原著論文以外の文献とした。

#### 2. 分析方法

Krippendorffの内容分析の手法に基づき、看護研究における質的内容分析の方法を示しているGraneheim & Lundmanの手法を参考に、分析対象論文の結果の内容分析を行った<sup>10)</sup>。分析対象の研究では、10代～60代の研究対象者がインタビューに回答しているが、本研究では、思春期・若年成人(15歳～39歳)

のサバイバーの結果に限定し、「身体機能の変化により生じた生活への影響」について内容分析を行った。意味内容を損なわないようにコードを作成した。次に、コードの内容の類似性・相違性を検討し、意味内容が類似する一時コードを集約した二次コードを作成した。二次コードの類似性に基づいてサブカテゴリーを生成した。同類性のあるサブカテゴリーの内容の抽象度を高めながら集約し、カテゴリーとした。倫理的配慮として対象文献の著作権法を遵守し分析対象とした文献の意図を損なわないよう配慮した。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 対象文献の概要

対象文献159件のうち、選定基準を満たす文献は2000年から2020年までの20年間で8件であった(表1)。研究実施国はノルウェー4件、イギリス2件、オーストラリア1件、カナダ1件であった。文献の筆頭著者の職種は、大学病院のがん科に所属する研究者4件、看護師1件、心理士2件、理学療法士1件、であった。分析方法は「質的帰納的テーマ分析」4件、「解釈学的現象学」1件、「ナラティブアプローチ」1件、「枠組み分析」1件、「事例検討」1件であった。

#### 2. 身体機能の変化により生じた生活への影響

悪性骨腫瘍に罹患した思春期・若年成人のサバイバーが認識する身体機能の変化により生じた生活への影響として、【日常生活動作の困難】【「新しい体」と生きていくための再構築】【社会参加の難しさと人付き合いの変化】の3カテゴリーと、10のサブカテゴリーが抽出された。カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]、二次コードは斜体文字で表記した。二次コードの生成に用いた文献として表1の文献番号を記した。

##### 1) 日常生活動作の困難

【**身体機能の変化に伴う制限**】として、**腫瘍摘出後の身体の安定性、柔軟性、バランスの低下により階段の上り下りが難しい**(No. 3, 4, 6, 7)、**1人で料理や子どもの世話、買い物や重い物を運ぶことが出来ない**(No. 3, 4, 6, 7)、**松葉杖などの補助器具の使用や車移動を与儀なくされた**(No. 1, 3, 7)経験があった。日常生活での制限が生じることによる【**身体機能の変化に起因する恐怖や苛立ち**】があり、**歩けなくなるリスク・義足の破損・転倒の恐怖**(No. 4, 6, 7)、**日常生活において他者を頼らなければならない苛立ち**(No. 2, 4, 7)があった。

腫瘍切除術や身体機能の変化に伴う【**痛みと倦怠感**

表1 悪性骨腫瘍のサバイバーを対象とした質的研究の概要

No.	著者	論文タイトル	掲載雑誌	対象者	目的	分析方法	結果(カテゴリー)
1	Artoli, Et al. (2020)	The patient's narrative agenda as an assessment tool: the story of Robert, suffering from osteosarcoma	Acta biomédica for health oridessional (2020): 91,S, 2, 7-15.	N=1 男性 21歳 2018年 養症 2019年3月腫瘍摘出術 調査時期:不明	ケーススタディを「ナラティブアジェンダ」を用いて分析する。 患者アセスメントツールを作成し活用可能かどうか検討する。	ケーススタディ ナラティブ アプローチ	1人の青年, Robertが抱える中心的な問題(治療のアドヒアランス, QOL, 情緒, ボディイメージ, 罹患者の経験に関する懸念)の問題, 希望と願望を明らかにしアセスメントツールを作成した。
2	Fauske, et al. (2019)	Identifying bone sarcoma survivors facing psychosocial challenges. A study of trajectories following treatment.	European journal of cancer care. (2019):28:e1311 9.	N=18 女性7/男性11 18-60歳 骨肉腫, ユーイング肉腫, 軟骨肉腫	治療後の経過でネガティブに影響するであろう要因を探索する。	帰納的 テーマ分析	ネガティブに影響するであろう要因のカテゴリーとして、「治療前の日常に戻る」「新しい日常, 逆境を成長に変える」「大切に購入した体験」「継続する苦勞」が明らかになった。
3	Martine, et al. (2019)	Qualitative study exploring patients experiences of being diagnosed and living with primary bone cancer in the UK.	BMJ Open. (2019):9:e028693.	N=26 女性8/男性18 13-77歳 腫瘍部位: 下肢	初発で骨腫瘍と診断された患者の経験を明らかにする。	枠組み分析	患者の経験について、「身体的Well-being」「情緒的Well-being」「社会的Well-being」「他者との関係性」「医療職の役割」について明らかになった。
4	Taylor, et al. (2017)	Sarcoma survivors' perspectives on their body image and functional quality of life post-resection/limb salvage surgery.	European journal of cancer care. (2017): 26:e12667.	N=23 女性12/男性7 19-60歳 全ての患者が患肢温存術を施行	心理面と術後の生活を再構成する動機付けに影響を与える思考パターンの洞察を明らかにする。	解釈的現象学	3つの分野(リハビリテーション運動, 形成外科, および心理学)の介入に参加した者を対象に, ボディイメージとQOLに関して「術前・術後のボディイメージの経験と可動性の心配」と「健康で幸福なQOLの再構築」について明らかにした。
5	Fauske, et al. (2016)	Changes in the body image of bone sarcoma survivors following surgical treatment -A qualitative study.	Journal of surgical oncology. (2016): 113, 229-234.	N=18 女性7/男性11 18-60歳 骨肉腫, ユーイング肉腫, 軟骨肉腫 臀部・骨盤	手術に伴う外見の変化の、生活やアイデンティティへの影響を明らかにする。	帰納的 テーマ分析	アイデンティティに影響を及ぼす要因として、「体の逸脱を隠す」「違うことを望まない」「魅力を感じない」「本当は何者であるか見られていく」「体の逸脱をさす」ことが明らかになった。
6	Fauske, et al. (2015)	Negative and positive consequences of cancer treatment experienced by long-term osteosarcoma survivors: A qualitative study.	Anticancer research. (2015): 35, 6081-6090.	n=8 女性4/男性4 18-50歳 骨肉腫	がんの罹患者後の生活で経験したこと を明らかにする。	帰納的 テーマ分析	「骨肉腫の治療の悪影響」「エネルギーの欠如」「ボディイメージの懸念」「余暇と社会生活の変化と喪失」「不妊の懸念」「既存の考慮事項」「苦勞の継続」「他人への思いやり」「アンビレンス」の経験が明らかになった。
7	Fauske, et al. (2015)	Cured of primary bone cancer, but at what cost: A qualitative study of functional impairment and lost opportunities.	Sarcoma. (2015):2015, 484196.	N=10 女性3/男性7 18-60歳 骨肉腫, ユーイング肉腫, 軟骨肉腫 腫瘍部位: 臀部・骨盤	身体的・心理的な晩期合併症の経験を明らかにする。	帰納的 テーマ分析	身体的・心理的な晩期合併症として、「日常生活の非現実性」「機会の喪失と将来の変化」「私はもはやかつての私ではない」ことがあげられた。
8	Parsons, et al. (2008)	"So, are you back to work yet?" Re-conceptualizing 'work' and 'return to work' in the context of primary bone cancer.	Social Science & Medicine. (2008): 67, 1826-1836.	N=14 女性6/男性8 18-38歳 骨肉腫	生きられた経験の特徴、就勞を再開した際の経験の特徴、これらの経験の関係を理解し説明する。	ナラティブ アプローチ	「Work」の概念化をし、「疾患に関するwork」「アイデンティティに関するwork」「職業に関するwork」を明らかにし3つのworkの統合を行った。

の出現]があり、患肢の痛みと倦怠感があり社会生活に影響した (No. 2, 7) との記述があったが、具体的な影響については記載がなかった。疼痛管理の難しさ (No. 3) が明らかになった一方で、運動プログラムで痛みが改善した (No. 4) との対処方法も明らかになった。

## 2) 「新しい体」と生きていくための再構築

治療後に身体機能が変化した体を「新しい体」と捉え日常生活・アイデンティティ・人生計画などを再構築していることが明らかとなった。新しい体でより良い日常生活を送るために、[日常生活動作の学び直しと自己管理]として、バランスを改善して転倒を予防するために、日常的に松葉杖や杖等を使う選択 (No. 5, 6, 7)、痛みを回避することや、補助器具を使うことによる日常生活動作の工夫 (No. 3, 4)、運動・リハビリテーション・体重コントロールなど患肢の自己管理や義足の調整 (No. 3, 4) をしていた。

身体機能に変化が生じたことで、罹患前に獲得していたアイデンティティと治療後のアイデンティティに変化が生じ、[新しいアイデンティティの獲得]をしていた。「アスリート」「健康な人」から「身体障害者」としてのアイデンティティを受け入れる (No. 4, 7)、男性・女性としてあるべき姿ではなく自分自身に重要なアイデンティティを構築する (No. 7, 8)、外見がアイデンティティに影響するため、手術による傷や外見の変化を意図的に美しいと捉える (No. 2, 4, 8) が明らかになった。

新しい限界を受け入れて治療後のライフプランの代替案を実現可能な範囲で探索すること (No. 2, 4, 8)、罹患前のライフプランで実行可能なものを活かす (No. 4, 8) ことにより [実現可能なライフプランの見極め] を行い、将来の人生の在り方を再構築していた。

## 3) 社会参加の難しさ与人付き合いの変化

身体機能の変化に伴う制限により [趣味や生きがいの喪失] が生じ、アスリートとしてのキャリア・継続的なスポーツへの参加を諦めた (No. 3, 4, 6, 7)、スポーツに関する趣味・生きがい・アイデンティティの喪失 (No. 2, 7, 8)、子育てや就労など様々な場面で機会を失った (No. 6, 7, 8) など身体機能による制限が生活に影響していた。このような影響から、[社会活動への参加の減少] が生じ、機能性の低下や倦怠感により自由な外出が困難となり外出が減少した (No. 2, 3, 4, 6, 7)、スポーツが出来ないことによる社会参加の減少 (No. 2, 6, 7) が原因となっていた。

た。社会活動への参加の減少により、友人との関係が希薄になった (No. 1, 6, 7) ことも挙げられた。社会活動への参加の妨げの要因として [ボディイメージに対する第三者の反応への苦悩] があり、第三者に患肢や傷を晒すことに恐怖・不快感がある (No. 2, 4, 5, 6)、世間の外見を評価する価値観に苦しむ (No. 3, 5, 8)、外見に対する反応に懐疑的になり他人を信用できなくなる (No. 4, 5)、第三者の反応から自分を守るために露出を避け外見の話題を避ける (No. 2, 4, 7) が明らかとなった。

罹患前と同様の就労継続の難しさ (No. 6, 7, 8) があり、[機能の低下による就労への影響] が生じていた。高い可動性の動作が必要な就労を継続出来ず諦めた (No. 4, 8) ことや、フルタイムの職に拘らないなど状況にあった働き方を再構築する (No. 7, 8) が挙げられ、就労の難しさが明らかとなった。一方で、やりがいやアイデンティティの保持のために就労を希望 (No. 7) していた。

## V. 考察

### 1. 悪性骨腫瘍のサバイバーの特徴

悪性骨腫瘍のサバイバーを対象とした質的研究から思春期・若年成人のサバイバーの結果を抽出して文献検討を行った結果、身体機能の変化により生じた生活への影響として、[日常生活動作の困難] [「新しい体」と生きていくための再構築] [社会参加の難しさ与人付き合いの変化] が挙げられた。身体機能の変化による日常生活動作の制限が思春期・若年成人に特徴的な、就労や友人関係に影響を及ぼすことが複数の文献から明らかになった。加えて、がんサバイバーでありながら身体障害者としてのアイデンティティが生じること、ボディイメージの変容が一時的な変化ではなく身体機能の変化を含む普遍的な問題であることが、思春期・若年成人の生活や人生に影響することが示唆された。

### 2. アイデンティティのゆらぎとボディイメージの変容に対する看護

「新しい体と生きていくための再構築」において、現状に即した新たなアイデンティティの獲得を試みる一方で、がんサバイバー・身体障害者としてのアイデンティティが生じ、その受け止めにゆらぎが生じていた。これは、がんの罹患後の生活を再構築する過程で身体の変化に伴うアイデンティティにゆらぎを感じる<sup>11)</sup>、という先行研究の結果と同様であった。また、思春期・若年成人のがん患者は、がんの治療に伴いこ

れまでに形成したアイデンティティの一部の喪失に直面し、がんを人生の一時的な中断と解釈し、変化した現実の中で自己を維持し外部リソースの動員によってアイデンティティを再確立することが明らかになっている<sup>12)</sup>。悪性骨腫瘍のサバイバーのボディイメージについて、先行研究においても他のがんサバイバーよりもボディイメージのスコアが低く、身体機能のスコアが低い者、女性、上肢に罹患した者のボディイメージのスコアが低いことが明らかにされている<sup>13)</sup>。AYA世代のがんサバイバーを対象とした先行研究では、ボディイメージの変容の受容の難しさや第三者の反応への苦悩が、がんの罹患によるアイデンティティのゆらぎとともに心理的問題に発展するリスクとして言及されている<sup>14)</sup>。従って、アイデンティティの再構築やボディイメージの変容の受容を促す支援とともに、これらを要因とする心理的不調が生じないよう、不安の傾聴など心理的な不安定さに寄り添った看護が望まれる。

### 3. 就労や友人との関係性など社会生活への支援

思春期・若年成人にがんが罹患する患者は、がんの症状や治療が、学業・就労、結婚・出産などライフイベントに影響を及ぼすことが明らかであり<sup>15)</sup>、悪性骨腫瘍のサバイバーも同様に、社会活動の減少や就労の困難、友人との関係性の変化を経験していた。治療中も友人との関係性を継続することを望んでいるものの<sup>16)</sup>、スポーツやアクティビティに参加できないことにより、友人との関係性が希薄になっていた。思春期・若年成人にとってはスポーツやアクティビティの参加が社会生活の一部であり、友人との関係を深める一因であることが示唆された。本研究で取り上げた文献の結果では、スポーツは諦めざるを得ないことと記述されていた。一方で、人工関節置換術や腫瘍摘出術を行った患者を対象に術前から術後5年間の運動量を評価した研究では、術前の身体機能が高い場合、術後に運動量の高いスポーツの実現が可能であった者や、スポーツに伴う合併症が生じていないことが報告されており<sup>17)</sup>、活動性の向上が期待される。悪性骨腫瘍のサバイバーが社会生活を再構築するにあたり、様々な選択肢の中から個人の意志を尊重したサポートが重要である。

本研究では、学業の継続よりも就労に関する記載が多かった。小児期に悪性骨腫瘍に罹患したサバイバーは身体障害者枠の雇用を選択できることから、他の小児がん経験者よりも就労率が高いと報告されているが<sup>18)</sup>、就労を継続中に悪性骨腫瘍に罹患した場合、就労の継続に困難が生じる<sup>19)</sup>。がん患者の就労継続には、身体調整、情報獲得、支援体制、職場の配慮が重要であり<sup>20)</sup>、就労支援として自らの調整の促進と職場の体

制や配慮など、外的因子への働きかけが望まれる。

### 4. 今後の課題

悪性骨腫瘍に罹患した思春期・若年成人のサバイバーが認識する身体機能の変化により生じた生活への影響として、身体機能の変化がもたらす制限により日常生活動作に困難が生じており、患肢の痛みと倦怠感の出現が明らかとなった。身体機能の日常生活で影響するレベルは、腫瘍の大きさと部位により選択される術式の違い（切断、人工膝関節置換術、自己骨又は人工骨の移植、回転形成術など）により異なり<sup>21)</sup>、各々の状況による差があることが予測される。本研究の結果では、患肢の痛みや倦怠感について記述は少なく対処方法についても限定的であった。先行研究では、患肢の痛みがあると身体機能のスコアの低さに有意差があったと報告されているものの<sup>22)</sup>、痛みの特徴や倦怠感の実態を明らかにした報告はない。生活を再構築するための実践である自己管理についても、本文献検討から明らかになった内容は限定的であった。

従って、悪性骨腫瘍に罹患した思春期・若年成人のサバイバーの患肢の痛みや倦怠感など生活に影響を及ぼす要因の実態と、セルフケアや対処方法を明らかにし、生活の充実に向けた支援を検討することが今後の課題であると考えられる。

### 5. 研究の限界

悪性骨腫瘍のサバイバーを対象とした分析対象文献が8件と少なく、日本の文献はなかったため、文化的に内容に偏りが生じている可能性がある。分析対象として文献の対象者は10代～60代と年代の幅が広がった。思春期・若年成人のサバイバーが認識する生活の影響を明らかにするため、思春期・若年成人のサバイバーの語りに限定して分析を行ったが、特徴を捉えることには限界があると考えられる。思春期・若年成人を対象とした質的研究により更なるニーズを明らかにすることが求められる。

## VI. 結論

思春期・若年成人のサバイバーが認識する身体機能の変化により生じた生活への影響として、【日常生活動作の困難】【「新しい体」と生きていくための再構築】【社会参加の難しさと人付き合いの変化】が明らかとなった。アイデンティティの再構築やボディイメージの変容の受容を促す支援とともに、心理的な不安定さに寄り添うこと、友人との関係性や就労の継続など本人の意思を尊重した社会生活のサポートが医療従事者に求

められる。今後の課題として、思春期・若年成人の悪性骨腫瘍のサバイバーが認識する患肢の痛みや倦怠感など、生活に影響を及ぼす要因の実態とセルフケアや対処方法を明らかにすることが急務であると考えられる。

## 参考文献

- 1) 公益財団法人がん研究振興財団 (2022): がんの統計2024, p99. [https://www.fpcr.or.jp/data\\_files/view/273/#toolbar=0&navpanes=0](https://www.fpcr.or.jp/data_files/view/273/#toolbar=0&navpanes=0) (検索日2024年11月1日)
- 2) Anderson, M. E. Update on survival in osteosarcoma. *Orthop Clin North Am* 2016; 47(1): 283–292.
- 3) 濱田健一郎, 中紀文, 井村慶紀, 吉川 秀樹. 下肢原発骨肉腫に対する外科的治療. *Japanese J Pediatr Hematol* 2015; 52(3): 289–293.
- 4) Han, G., Bi, W. Z., Xu, M., Jia, J. P., Wang, Y. Amputation versus limb-salvage surgery in patients with osteosarcoma: A meta-analysis. *World J Surg* 2016; 40(8): 2016–2027.
- 5) Barrera, M., Teall, T., Barr, R., Silva, M. Greenberg M. Health related quality of life in adolescent and young adult survivors of lower extremity bone tumors. *Pediatr Blood Cancer* 2012; 58(2), 265–273.
- 6) Bekkering, W. P., Vliet Vlieland, T. P. M., Koopman, H. M., et al. A prospective study on quality of life and functional outcome in children and adolescents after malignant bone tumor surgery. *Pediatr Blood Cancer* 2012; 58(6), 978–985.
- 7) Nagarajan, R., Mogil, R., Neglia, J. P., Robison, L. L., Ness, K.K. Self-reported global function among adult survivors of childhood lower-extremity bone tumors: A report from the Childhood Cancer Survivor Study (CCSS). *J Cancer Surviv* 2009; 3(1): 59–65.
- 8) 日本看護科学学会. 看護学術用語検討委員会. n.d. JANSpedia-看護学を構成する重要な用語集-. 生活. <https://scientific-nursing-terminology.org/terms/life/>, (検索日2024年11月1日)
- 9) 新村出編. 広辞苑第7版. 岩波書店 2018; 1598.
- 10) Graneheim, U. H., Lundman, B. Qualitative content analysis in nursing research: Concepts, procedures and measures to achieve trustworthiness. *Nurse Educ Today* 2004; 24(2): 105–112.
- 11) 天野功士, 鈴木久美. がん患者が生活の再構築過程において直面する課題と取り組みに関する文献検討. *大阪医大看研誌* 2017; 7: 72–81.
- 12) Soanes, L., Gibson, F. Protecting an adult identity: A grounded theory of supportive care for young adults recently diagnosed with cancer. *Int J Nurs Stud* 2018; 81: 40–48.
- 13) Holzer, L. A., Huyer, N., Friesenbichler, J., Leithner, A. Body image, self-esteem, and quality of life in patients with primary malignant bone tumors. *Arch Orthop Trauma Surg* 2020; 140(1): 1–10.
- 14) Zebrack, B. J., Stuber, M. L., Meeske, K. A., et al. Perceived positive impact of cancer among long-term survivors of childhood cancer: A report from the childhood cancer survivor study. *Psychooncology* 2012; 21(6): 630–639.
- 15) Warner, E. L., Kent, E. E., Trevino, K. M., Parsons, M. H., Zebrack, J. B., Kirchoff, C. A. Social well-being among adolescents and young adults with cancer: A systematic review. *Cancer* 2016; 122(7): 1029–1037.
- 16) Graetz, D., Fasciano, K., Rodriguez-Galindo, C., Block, D. S., Mack, W. J. Things that matter: Adolescent and young adult patients' priorities during cancer care. *Pediatr Blood Cancer* 2019; 66(9): 1–8. Doi;10.1002/pbc.27883
- 17) Lang, N. W., Hobusch, G. M., Funovics, P. T., Windhager, R. Hofstaetter, G. J. What sports activity levels are achieved in patients with modular tumor endoprostheses of osteosarcoma about the knee?. *Clin Orthop Relat Res* 2015; 473(3): 847–854.
- 18) Yonemoto, T., Kamibeppu, K., Ishii, T., Iwata, S., Hagiwara, Y., Tatezaki, S. Psychosocial outcomes in long-term survivors of high-grade osteosarcoma: a Japanese single-center experience. *Anticancer Res* 2009; 29(10): 4287–4290.
- 19) Ketterl, T. G., Syrjala, K. L., Casillas, J., et al. Lasting effects of cancer and its treatment on employment and finances in adolescent and young adult cancer survivors. *Cancer* 2019; 125(11): 1908–1917.
- 20) 橋本理恵子, 今井芳枝. がん患者の就労状況に関する文献検討, *JNI* 2019; 17(1): 1–9.
- 21) Aksnes, L. H., Bauer, H. C. F., Jebsen, N. L., et al. Limb-sparing surgery preserves more function than amputation A Scandinavian sarcoma group study of 118 patients. *J Bone Joint Surg Br* 2008; 90(6): 786–794.
- 22) Katsumoto, S., Maru, M., Yonemoto, T., Maeda, R., Ae, K., Matsumoto, S. Uncertainty in young adult survivors of childhood and adolescent cancer with Lower-Extremity Bone Tumors in Japan. *J Adolesc Young Adult Oncol* 2019; 8(3): 291–296.